

私の農業経営の足跡

— 山 副 孝 雄 —

(地域農業事情に関する研究会報告その1)

平成 31 年 3 月

公益財団法人 日本農業研究所

山副孝雄氏の報告「私の農業経営の足跡」

公益財団法人日本農業研究所理事長・研究員

地域農業事情に関する研究会主査

田 家 邦 明

1 日本農業研究所では、平成29年秋に地域農業事情に関する研究会(主査 田家邦明)を立ち上げ、京都府京丹後市^(注)を対象として、調査研究をスタートさせている。この研究会の目的は、国レベルの農政上の課題や現状の認識が、実際の農業の現場でどのように認識され、具体的な政策にどのように反応しているか、ミスマッチングがあるとすればその要因は何か、それを改善するためにはどうすれば良いか等のマッチングの問題を特定の地域を取り上げ、調査研究することを目的としている。研究会のメンバーは、基本的には本研究所の研究員から構成されている。

2 京丹後市を対象にしたのは、そこにおける農業について先進地として全国的に注目されているような目立つ存在でない「普通」の農業地帯であること、しかし内実を見ると、昭和50年代から平成10年代にかけて内地最後の大規模な国営農地開発事業が実施され約560haの畑地造成が行われている地域であること。さらにこの地域はかつて丹後ちりめんの大産地で、昭和30年代から昭和50年代の前半にかけて、農村婦人の労働力に依存した出機形態(京都西陣や地元の親機機業から単位当たり加工賃が支払われる賃加工方式が太宗)の機業が多く、多くの農家に浸透し、同時に他の地域と同じように男子労働力も恒常的か否かに関わらず外に就業機会を求め、兼業化が急速に進んだが、ちりめん生産(白生地)が今やピーク時の3%程度に劇的に縮小し、農家兼業の機業もほとんど残っていないという経過を経た地域であることによる。この過程で水稻単作化が進行したが、このような経過を経てきたことが、この地域の現在に至る農業・農村にどのような影響をもたらしているか関心が持たれる。このような理由だけでなく、主査の出身地であり、土地勘があり、協力が得られ易いこともある。

3 平成29年度においては、第1回は、京丹後市農政課長、第2回京都府丹後農業改良普及センター所長、同丹後農業研究所学舎主幹から、それぞれこの地

域の農業に対する施策の紹介を中心とした内容の話をお聞きし、第3回は生産者である山副孝雄氏から、機業の農家への進出という中で、どのように経営を展開されてこられたか等について話をして頂いた。少し時間をおき、平成30年度には、第4回目として京都府農林水産部副部長から京都府から当地の農業に期待することを中心にお話頂いた。平成31年度に更に生産者、集落等の具体的な営農について追加的に調査研究を行った上で、京丹後市の振興策とも関連付けながら、高齢化・過疎化が進む中で農業・農村への期待を含め報告書を取りまとめる予定である。

4 今回、山副孝雄氏の報告だけを取り出し、刊行することにしたのは、同氏が足の負傷によって十分な農作業が出来ないという事態が生じ、基本的に経営を飯米分の水稻生産に限られるという思い切った縮小を行い、それ以外は他の方にお願ひし、氏がお考えになっている水準の経営から実質的にリタイアされることをお聞きしたことによる。わざわざ東京まで出向いて頂き、貴重な資料とともにして頂いた興味深いお話を地域農業事情に関する研究会の報告書の分冊としてまとめ、お渡ししたいと思ったことによる。

今回の冊子は、第3回研究会における氏の報告と質疑である。氏のように、農家のオール機業化が進む中で、数少ない専門的生産者として生きる選択をされ、仲間とともに、集落の農地の受け皿となって今日まで農業を営んでこられた方が果たされた役割については、来年度中にまとめる報告において、キチッと評価したいと思う。

5 同氏は、地元高校農業科卒業以来農業に従事し、70代後半のお年にかかわらずその当時でも、8haの水稻に国営農地開発によって造成された農地での京野菜栽培を加えた複合経営を展開されていた。

これまで、研究所において多くの生産者をお招きし、お話をお聞きしているが、日本でも有数の経営規模が格段に大きい方々であった。山副さんは、10ha程度の規模であるが、これは集落の水田の利用を仲間とともに分かち合って引き受け共存されてきたことによる。個人の経営体として就農以来専業として新しい品目を導入しながら水稻を主とした複合経営を展開している地域の代表選手と誰もが見ており、現役で頑張っておられた。主査の出身中学である京都府竹野郡弥栄町立（当時）弥栄中学の先輩でもある。

6 京丹後市は、平成 16 年 4 月に、それまでの 6 町が合併して誕生した。15 年経過した。それまでの 6 町の資料が散逸し、農業分野に限らず、それぞれ各町で生活・産業面で何を目指して行政を展開されてきたのか、資料的にそれまでの個別町の発展方向につき形成されてきた町民の意志を確認し、それを踏まえ、市民、各地域にとっての合併の成果を評価し今後の市勢の方向を考えることが難しい状況となっている。

このように各分野において各町の行政の基本的文書が保存されていない状況で、この地域の農業の展開過程を知る上で、特に、昭和 30 年代以降機業が農家を席卷する中で農業が存続した事情を知る上で、一貫して農業経営を営んでおられる方からお話頂くことが有用であると考え、適任者として山副氏にお願いした。我々の関心に十分応えて頂いた。また、農業委員会の委員をはじめたくさんの公職に着かれており、農業をはじめ地域を巡る事情にも通じておられていたため、研究者の先生方の関心に応じ、貴重なお話をして頂いた。

7 最後に、この地域の社会経済の動向を研究対象とした参考文献に触れておきたい。この地域は、昭和 30 年代から 50 年代前半にかけて、それまでの丹後ちりめんに加え西陣織の出機が特に農家に急激に浸透し、折しも昭和 38 年の大豪雪が重なり、これらを契機とする集落の挙家離村が出現する等地域の社会経済に急激な変動をもたらした。このため、特に人文地理学の分野（『人文地理』等に研究論文が掲載。）で関心が持たれ、個々の農家の経営の詳細まで立ち入った農家・地域の対応に関し多くの研究論文が残されている。最近でも社会学の研究者によって、機業の進出による教育面の影響とそれに対する教員組合による対応に焦点を当てた文献が出版されている（小林千枝子 2014『戦後日本の地域と教育—京都府奥丹後における教育実践の社会史—』学術出版会）。同書の第 1 章第 1 節（「奥丹後の地域的特色と産業構造」）及び第 2 節（「「僻地」の登場と離村・廃村の現実」）でコンパクトに奥丹後の農村に機業が急激に浸透した過程とそれに伴い生じた現象を記述している。余談であるが、これらの文献を渉猟している際、高校時代に地理を教えて頂いた先生が帝塚山大学に転じて漁村の研究者として執筆された研究論文に巡り逢った（島田正彦 1968「漁業不振と奥丹後漁村—広がる機業兼業をめぐって—」『人文地理』第 20 巻第 2 号 1-30 頁）。

農業経済学の観点からは、人文地理学の論文が書かれた時期と同じ頃、京都府農業会議でも、再三にわたり調査が行われている（例えば、京都府農業会議 1968「ハタ織りと離村」）。京都大学農学部研究者によって、この地域を対象に包括的に調査研究が行われた文献が昭和 61 年に出版された（坂本慶一・高山敏弘……田修共編著 1986『地域産業複合体の展開』明文書房）のを最後にして、知る限り、最近は文献が書かれていない。

これらの文献の中で、山副氏が在住する弥栄町鳥取集落を対象に調査を行っているものが複数以上ある。機業が浸透していく中で、どの集落とも農業経営が沈滞していったと思われるが、鳥取集落は弥栄町でも機業が盛んであったのに関わらず、積極的な農業経営の展開が行われていたことが関心を集めたと考えられる。山副氏は、この活動を中心として担い、ちりめんの浮沈という荒波をかぶった地域の農地・農業の維持存続に大きな役割を果たされたことがこれらの文献からも推測される。

ちりめんに着目した地域産業論の観点からも、農家への出機形態によって面的に広がった展開に着目して論文が書かれており、そこでも、農家、集落、行政の対応の詳細が丁寧に調査分析されている（青野寿彦 1975「地場産業の展開による農村工業化の一事例—京都府丹後機業地—」中央大学経済研究所年報第 6 号）。

なお、丹後の経済や丹後の地域産業について、包括的なテーマの下で、それぞれ立命館大学、龍谷大学の研究者が執筆された次のような文献が刊行されている。前者はちりめん産業に、後者は特に機械金属産業に焦点が当てられている。

立命館大学人文科学研究所（1983）『人文科学研究所紀要』第 36 号（特集丹後をめぐる経済状況）

松岡憲司編著（2007）『地域産業とイノベーション—京都府丹後地域の伝統・現状・展望』日本評論社

（注）京都府京丹後市

平成 16 年 4 月に、峰山町、大宮町、網野町、丹後町、弥栄町、久美浜町の 6 町が合併し、誕生した。丹後、奥丹後という地理的呼称との関係を巧みに説明している、先に示した小林千枝子（2014）の第 1 章第 1 節の冒頭の箇所を引用する。なお、平成 31 年 1 月 1 日現在推計人口は、52,395 人である。

—京都府北部の日本海に突き出た丹後半島一帯の市町村、現在の宮津市、京丹後市、与謝野町、伊根町に2市2町を丹後という。このうち京丹後市が奥丹後と呼ばれる地域で、1955年以後2004年の市町村合併まで3郡6町からなっていた。すなわち中郡の峰山町と大宮町、竹野郡の網野町、丹後町、弥栄町、熊野郡の久美浜町である。丹後半島中央部の弥栄町から丹後町にかけての地域には丹後山地が広がっている。京都市からみるとこの3郡は山の奥にあるところから奥丹後というのだろうか。

私の農業経営の足跡

京都府京丹後市農業生産者

山 副 孝 雄

第3回 地域農業事情に関する研究会

1. 日 時： 平成30年2月5日（月）14:00 ～ 16:00
2. 会 場： 日本農業研究所特別会議室（3階）
3. 講 師 山 副 孝 雄 氏（京都府京丹後市農業生産者）
4. テーマ： 「私の農業経営の足跡」（仮題）
5. 出席予定者（五十音順、敬称略）

【オブザーバー】

吉 田 俊 幸（農政調査委員会理事長・元高崎経済大学学長）
菊 地 弘 美（全国農地保有合理化協会副会長兼専務理事）
中 村 光 毅（中央大学経済研究所客員研究員）

【日本農業研究所役職員】

田 家 邦 明（日本農業研究所 理事長・研究会主査）
小 澤 健 二（同 客員研究員・新潟大学名誉教授）
八 木 宏 典（同 客員研究員・東京大学名誉教授）
両 角 和 夫（同 客員研究員・東京農業大学総合研究所教授）
坪 田 邦 明（同 客員研究員・明治大学特任教授）
小 川 増 弘（同 客員研究員・畜産草地研究所 家畜生産管理部長）
森 田 明（同 客員研究員・宮城大学食産業学群准教授）
谷 康 裕（同 総務部長）

田家 こんにちは。では、第3回の地域農業事情に関する研究会を行いたいと思います。

今日の趣旨について若干お話しします。この研究会は去年の秋からスタートしまして、第1回は京丹後市の農政課長、第2回は京都の丹後農業改良普及センターの所長さんと丹後農業研究所の主幹からお話しいただきました。

どうも現状というよりは、それぞれその地域でどういう制度、施策を展開しているという話が中心になって、私どもがお願いした趣旨と外れたのですが、今回は地元の高校の農業科を御卒業以来、一貫して農業に従事されておりまして、現在なお8haの水稲と農用地開発した畑地を利用して、京丹後野菜を組み

合わせた複合経営を行っている山副孝雄さんに来ていただきまして、御経験を語っていただくことにいたしております。

この研究会は、去年の秋から始めたのですが、今年度については、今までの展開過程を中心に、今までの3人のお話と、私が展開過程についての評価をしたものを書こうと思っていて、それをまとめて報告書をつくろうと思っています。来年度は、29年度の研究を踏まえて、今度は展開過程、今後の方向を検討してもらおうと思っています。

農業研究所では、今まで生産者をお招きしていろいろな話を聞く機会があったのですが、どちらかといえば、日本でも有数の経営規模の稲作農家の方が多かったのです。ただ、山副さんは、今申しましたように、10ヘクタールの経営規模ですが、個人の形態としては、就農以来、新しい作物を入れながら、水稻中心の複合経営をずっとやっておられます。地域では代表選手で、まだかくしゃくとして現役で頑張っておられる方です。

現在、この地域は、2004年4月に6町村が合併しているところです。6町村の資料がそれぞれ散逸しまして、地域全体の展開過程の概観を資料によって行うことが非常に難しいわけでございます。オーラルヒストリーではありませんが、山副さん個人の御経験を話していただきまして、この研究会で収集した1つの重要なデータにしたいと思っております。

先ほど申しましたように、農業委員会委員を初めとしまして公職を非常にたくさんおやりになっておりまして、農業にこだわらずに、地域のさまざまな問題について御関心があることについては、的確にお答えいただけるのではないかと思います。

4点目です。行政のデータは資料が散逸して物事を見るのがなかなかできないのですが、研究面から見たら幸いなことがございまして、この地域は、昭和30年代から40年代にかけまして、それまでの丹後ちりめんプラス西陣の出機が急速に入ってまいりまして、これに対応できない集落は挙家離村し、地域の社会変動が非常に顕著に見られたところであります。それで、多くの研究論文が残されておりまして、非常に珍しいことではないかと思っています。

最近でも、今年、婦人労働、家庭、学校、教育面での影響に関して、作新学院大学の女性研究者によって学術書が書かれています。また、文献の中でも、

山副さんが在住されている鳥取集落について調査を行っているのが複数以上ございまして、山副さんにはそれをお渡ししていませんけれども、該当箇所について、先生方には参考資料で提供したところがございます。

山副さんには、お手元にありますけれども、資料を3つ用意していただいております。1つ目は、手書きのものをこちらで清書させていただいたもの。2つ目は、補足として手書きで用意していただいたもの。3つ目は、合併前に旧弥栄町が発行した広報紙を探していただき、参考となる箇所をコピーしていただいたものです。広報紙に関しましては大部にわたったものですので、私が勝手にピックアップさせていただいてものを配っております。

山副さんには、単に農業だけではなくて、織物が農家に入って地域にどのような変化をもたらして、そのとき山副さんは、農業なり家業についてどういう意思決定をされたのか、あわせてお話をいただきたいということを注文した関係で、追加的にいろいろなものを書いていただいたり、資料を選んでいただいております。

せっかくの機会ですので、山副さんをお願いしまして、当初は4時までとしていたのですが、4時半ぐらいまで委員会を行いたいと思っています。お任せしますけれども、山副さんには1時間程度お話しいただきまして、その上で各先生の意見や質問をいただくという方法で進めていきたいと思いますので、ひとつよろしくお願いします。

では、山副さん、どうぞお願いします。

山副 皆さん、こんにちは。未熟者で、こんなところに来させてもらうような人間ではないですが、年齢だけは今年喜寿を迎えようとしている中、どういうことか去年の秋口、田家邦明さんから矢が向いてきました。断っていたのですが、あなたのスタイルで話してもらったらよろしいのでということでしたので、私の農業がスタートしてから現在までの60年を話させていただきます。

昭和16年6月21日生まれの山副孝雄です。現在76歳と8ヵ月、6月が来れば77ということで、4人兄弟の長男として生まれて、高等学校を卒業してから今日まで、農業経験年数は満58年になり、去年は、こちらのほうで子供たちに

結婚 50 周年を祝って頂きました。

現在の経営は、私と妻超高齢化の 2 人がぼちぼちやっているようなことで、現在、畑作は国営農地開発した場所で、それと水稻、コシヒカリの美味しい米づくりの 2 本立ての総合経営であります。

経営面積としましては、借地の 660a を合わせて 780a。国営畑は今 50a を借地で借りています。作付面積は、京野菜、枝豆などつくりやすいもの 50a と、780a のうちイノシシや獣害の関係で 700a を耕作しております。

農機具所有状況は、農作業場、機械を入れる格納庫、トラクターは 35 馬力と 25 馬力の 2 台、昭和 60 年に入れたのと平成 7 年に購入とそれはそれは、私の体のような老齢化した機械であります。田植機は 5 条植え 1 台、コンバインは 3 条刈り 1 台。乾燥機は反当 8 俵でしたら 90 俵ぐらい入りますので、1 町ぐらの稲が刈れるということです。もみすり機は、4 インチといいまして、1 時間に 20 俵ぐらいすれる。1 袋 30 キロで 40 袋ぐらいすれるぐらいの能力です。代かきはトラクターに 2 m 幅のアタッチメントとしてつける一般的なものです。背負いの草刈り機 2 台、自走式の草刈り機 1 台、あぜつけ機——水が漏る関係で、あぜつけを行うために個人で持っています。動墳 2 台、動散 2 台、運搬車、これはチューリップの球根をつくり始めたときに、補助事業で個人的に入れております。歩行型耕うん機は、昭和 45 年に出た機械で、軽トラックは、私と妻が 1 台ずつ 2 台です。

それから、農業経営改善に役立ったことは、補助融資事業、丹後国営農地開発事業、昭和 62 年入植。この話が出たのは、昭和 50 年ごろから丹後に農地造成をやって、未来の輝く農業ということで当時の森岡町政、この方はやり手で、7 期町長さんにお世話になって、丹後の発展のために尽くしていただいたわけです。

農地取得資金は、水田を買うために、50 年から 60 年ごろ 3 回ほど利用、私が資格を持っている人に教えてもらって、所有権移転は全部しております。

農業改良資金として、チューリップ種子球根導入事業に利用させてもらいました。

それでは、私の今日までの流れを話していきたいと思っております。

私の家は、明治 10 年にスタートして、山副家の本家から 3 代にわたり分かれ

て分家したのですけれども、私のうちが一番最後に分かれ4代目です。

私の父は、戦争には甲、乙、いずれも身体面で不合格で、肋膜炎を病んで10代のころは3～4年体調を崩して、あなたには嫁さんがいないと。お医者に見放されていたのですが、どうにか自分でいろいろと努力して、嫁さんをもらえることになって、昭和15年に、29歳で25歳の母と親戚の紹介で一緒になって、私が16年に長男として生まれました。農業に本格的に取り組んだのは、高校を卒業して、昭和35、36年からでした。

私は、この道、農家など不向きと思っていたのですけれども、おやじが百姓の子は百姓だという一言で、あの頃は、機屋さんなら機屋さん、百姓なら百姓、サラリーマンならサラリーマン、親のやっている仕事を継ぐのは自然のスタイルでありました。私も勉強が好きでしたので、何とか上の学校に行きたいと思っていたのですが、その年代に通信教育もありまして、東京農大の通信教育課程を受けてみようということで、スクーリングに参加しながら、農業も捨てたものではない、よし、やろうかなという感じにだんだんとその気になり、昭和36年には府の教育委員会主催の国内研修、これは青年団活動とか農業経営、いろいろな産業の進んだところということで長野県とか埼玉県に2週間ぐらい勉強させていただきました。

本格的にやり出したのは昭和35年からですが、35年から37年の地代は食料増産のときでありまして、まだ周囲にも機械化が進んでいなくて、私の家では2頭の役牛の力で田んぼをすいたり、農産物の運搬をしておりました。

高校を卒業したときには、自家の水田と借地で1町2反、丹後でチューリップ球根を昭和22、23年からつくっている人がいて、これはいいぞということで、どのうちも2aずつやろうということで、昭和32年に農協や町が中心となって農家の私たちに進めていただきまして、133名の農家によって発足して、当時、新規作物として大変注目されました。

弥栄町は、昭和30年3月に合併したのですが、その当時、弥栄村と山間地の野間村が合併して弥栄町が誕生したわけです。合併時は8,000人の人口でありましたが、55年までの25年間は、全国共通でしょうけれども、過疎との闘いがありました。そんな中で、道路、交通、水道施設、また、たくさん雪が降りましたので、除雪機械による環境整備、教育施設充実、スイス村の建設、多くの

事業をその当時の森岡町長さんが進めて、他町に先駆けてモデル的なまちづくりをしていただきまして、昭和 30 年の合併から 5 年過ぎたときには、人口が 400 人減の 7,600 人になりまして、1,300 戸の農家のうちで兼業で主に農業が 602 戸、専業で食べていくのは 298 戸、主に兼業が 400 戸で、その年代は役牛によって田んぼを起こしていきまして、604 頭、水田はその当時 650 町歩、畑が 150 町歩、今では考えられないぐらいたくさんありまして、現在大変減少しております。

そうした中、昭和 39 年から 5 カ年計画でチューリップをこれからやっていこうということで、町も頑張り、農協も頑張り、生産者も頑張りして、調べたところ、弥栄町には 123 ヘクタールぐらいの適地がある。そうすると、今の価格で 1 億 5,000 万円ぐらいはある。これを目標にしてやろうという計画が設定されました。

昭和 35 年 7,600 人が、昭和 44 年には 450 人減の 7,051 人に。奥丹後のどの町村も同じような現象でした。こうした中で、現在は京丹後市ですが、それまでが丹後、昭和 20 年代から 40 年ごろは、丹後でも奥の奥で奥丹後という名称で呼ばれておりました。

そんな中で、農業構造改善事業計画をやろうということで、農道拡幅、3 m 幅ぐらいにして、ライスセンターも他町に先駆けて設立、農業機械の 1 つ、テイラー、耕うん機も 3 戸に 1 台が急速に入ってきてまして 442 台普及。もう機械でやる、牛は必要ないということで、和牛は 5 年間で 600 頭が 300 頭と半分に減りました。

そうした中で、田んぼは、650ha が 610ha と 40 町歩減って、畑も 30ha 減って 120ha。このときは 100 年に一度という三八豪雪で、丹後にとっては、まだブルドーザーなどの機械がなかったもので、踏み固めては踏み固めて降り積もった、屋根の上を歩いているようなことで、積雪が 2 m 50～60cm、山のほうは 5 m にも 6 m にもなったときでした。それからすぐにブルなどの機械化になって、そんな日はないようになりました。

昭和 44 年に、私の集落の隣の村で一番状況のいい和田野地域に、テイラー、耕うん機に次いで第 1 号として 4 台のコンバインが入りました。

そんな中で、私の鳥取集落は、今度はチューリップでいこうということで、

集団栽培圃場 2.4ha、生産者は 14 人がつくっていたのですけれども、交換分合によって竹野川沿いの一番適地を選定して、新たにスタートしました。私たちの村のほかに 14 集落、合わせて 133 人、その年に 30 万球出荷して、1,300 万円の売り上げを出しております。

45 年に国の減反政策、生産調整がスタートしまして、全国一律 7.4%、京都が 7.1%、私のところが 7%でした。本町として 596ha の作付。このときに 1 俵は大体 8,000 円、1 袋 30 キロで 3,700~4,000 円のほどの単価が踏まれておりました。

昭和 47 年、機屋さんがどんどん増えて、全戸数の 3 割強、弥栄町全域で 459 戸になり、1 軒当たり 4.8 台、大体 5 台です。私は専業の水田農家であったのですが、4.8 台の収入を上げようと思ったら、一反田を 50 枚、5 町歩つくらないと、収入があがらないときであります。

昭和 38 年の 100 年に一度あるかないかの豪雪にあい、旧野間村、今、スイス村としてスキー場になっています。住山地区は全戸離村に踏み切って、周囲の温かい応援や見守りの中で、平場の旧弥栄村に移住してきて、何をやろうかと考えていた時ちりめん産業が脚光を浴びていましたので、親機の人をお願いして、賃機織りをして生計を立てていこうとこの道に入りました。

こうした中で、京都府も多額の融資制度、大きく伸びようとする丹後地方にちりめん産業がますます発展していくように、先ほども申し上げましたけれども、森岡町長を先頭に大きく発展を遂げていったわけです。このときに、府も金を下ろすのだけれども、丹後の機業も振興対策していかなければいけないのではないかというのと同時に、事業も発展していきました。産声を上げて間もない、年数が浅い零細の機屋さんの経営が安定することが狙いでありました。そうした中で、機屋さんに携わる女の人の健康増進ということで、行政も頑張って婦人研修センターを建設していったわけです。

昭和 47 年ごろまでは、供給は需要に追いつかず、品不足で、今思うと昼夜問わず、体を犠牲にして 17~18 時間、1 日に 2 日分ぐらい働いて、食事の時間も惜しむ労働で、行商に来られる人からおかずを買い、家では御飯を炊くだけ。機を織りながら御飯を食べていた生活スタイルの家が多かったようです。

そんな状況の中で、従事する奥さん、御主人方は食事のバランスがとれてい

ないので、健康状態が非常に悪いと保健婦さんに指摘されていましたが、お金がたくさんもうかるので、耳をかたむけず若さと体力で、ちりめん生産に頑張っていました。

48 年ごろからちりめんの生産過剰、景気がいいときは、品質の良いちりめんも悪いちりめんも同じ値段で売っていたのですけれども、売れが悪くなってきましたら極端に価格差が出てきて、世の中の景気後退と合わせ不良品の続出で不況のあらしが吹いて、そこでまた町独自の 8,000 万円の緊急融資制度を設けて、49 年 4 月から機業組合や商工会を窓口として貸し出しを、弥栄町が 1 市 10 町に先駆けていち早く取り組んだようなことであります。

そうした中で、私たちの農業はどうかと申しますと、昭和 47 年、田植え機を 45 台個人導入されて、第 1 回弥栄町米価大会が実施され、2、3 年続いたのですが、48 年も同じように 500 人の農業者が一堂に介して決議表明したようなわけで、私も当時、若い者を代表してやらせてもらったような経過もあります。

そうした中で、農業も経費がかかるし、米価を上げてもらわないと困るということで、全国的な傾向だったと思うのですが、毎年 3、4 人が同行して 47 都道府県の皆さんと一緒に行動、私も 4 年間ほど東京に行かせてもらいました。

この年、町民がつくる弥栄町総合計画、弥栄町も計画的な審議会をつくって、10 年間それに沿って頑張るということで、各分野の指導的な人は委員として、私もその一員に加えていただいて頑張りました。

そうした中で、チューリップ組合も成果を挙げていき、丹後の優良生産集団表彰を受け、メンバーの面積も大きくなり、そうした中、毎年切り花の産地に球根を出荷しているわけですが、高知とか徳島、埼玉、岐阜方面に自分たちのつくった球がきれいな花を咲かせているだろうかと。親が自分の娘を嫁さんに出して、その家に行って役に立っているだろうかという気持ちでいい花が咲いていたらいいがと思いながら、毎年 J A 担当チューリップ協会役員一緒に産地研修に一泊で行きました。

昭和 49 年から 61 年代は、49 年がオイルショックの年でしたが、この時分を境にして、丹後機業の不況は、国の総需要抑制政策や主に韓国の外国製ちりめん輸入が追い打ちをかけ、無期限休機、大幅な採算割れになって、従業員の解雇等、かつてない大ピンチに陥ったということです。私もあの時分に、機（ハ

タ)には転向していなかったですけれども、少しの浮き沈みはあるが、当分続いていこうと素人ながらに考えたものです。それは、機（ハタ）を織っている方も、まさかこんなことになるとは、初めての経験であった関係で、ショックもすごく大きかったように思います。

こういうことになった原因の1つは、指導的立場にある親機業者が織物関係の大手メーカーの指示によって、織物指導に韓国へ出向けということを率先して指導したことだと私は思っています。とにかく、自分さえよければと、ひとりよがりの考えで、何とか現金収入ということで、私の町でも技術を持った人が外国にかなり行かれたのが現実でした。

昭和50年のセンサスによりますと、1,630戸の63%、1,025戸が農家で、そのうち69戸は専業農家、米、野菜、いろいろな作物をつくって食べていくスタイルでした。しかし、米も余り現象になってきた関係で、パン給食をやめて米飯給食運動を町議会メンバー、そして私たち農家も立ち上がって給食会に働きかけていったのですが、なかなか思うようにいきませんでした。現在では、私も学校給食の供給メンバー9人の1人として、月に5日ほど丹後の小・中学校23校に美味しい上白米（特別栽培米コシヒカリ）を届けています。

10年後の昭和60年のセンサスでは、同じ1,630戸のうち、55.7%、300戸減って907戸は農家、そのうちの専業は69戸から、大規模でやっていく人が13戸増えまして、82戸に増えてきております。

昭和50年1月には、深刻な不況と輸入品の増加に悩む全国和装産地の仲間が東京に集結して、危機突破全国大会で国会周辺をデモ行進して、大蔵省、通産省、農林水産省に苦しい現状を訴えていたことを昨日のように思い出しております。

昭和52年には、4年続きの大不況の中、生易しくない丹後の再建に向けて、「明日の丹後を考える討論会」が各種分野のリーダー的な方、丹後労連の理事長、府会議長、昭和22、23年に島根県から来た日進製作所、今でも丹後の企業のナンバーワン、各種自動車、電気器具の部品を製造して、大勢の方を吸収して丹後発展を築いたわけですが、それに森岡町長の4人で意見交換したと。聴衆者も300人いたと思うのですが、質問を受けて答弁したりして、まとまった話は、丹後企業は昭和30年以降、丹後の反映を支えてきましたが、最近48年

以降、不況と物価高、生活様式の変化など、着物離れが急速に進んできたということが1点、また、織物業者は高度経済成長と相まって、全体が恵まれ過ぎていたと。これは、日進製作所の社長・錦織さんが言っていたわけですが、これまでのもうけの上にあぐらをかいて、何かやっているうちは何とかなるといふ他力本願のような感じでやっていたのも不況に大きくつながっていたということもあったようであります。

そうしたことから、不況はさらに厳しさを増していき、また、業種間の所得格差が生じ、中高年の働き場所がなくなっていったということで、丹後はまた一転して過疎地へと逆戻りと。先ほども言いましたように、日進製作所の社長が、皆さんを前にして、苦言、警告したものです。私も本当にそのとおりだなと思いました。神武以来の好景気と。歴史上初めての信じられない場面に直面して、丹後人誰もが神話現象を信じていた感があり、実は私も、少々の浮き沈みはあるけれども、今まで続いたものが、そうどこかとなくなるようなことはないだろうと思っていたようなことです。

こうした中、弥栄町全体で89業者、台数にして2,379台、22%に当たる540台の古い機械を廃棄する。89軒の親機業者のうち、13の親機業者が廃業に追い込まれていったということです。丹後一円に目を向けますと、当時の資料を見ますと、丹後では1,290業者、台数は全体で3万9,412台ということですが、その12%に当たる5,022台が廃棄方向へ向かって、その対象となるのは、古くて使いものにならない織機から順次ハンマーで、身を切られる思いでたたき割って、くず鉄へと変わっていったと。私はそばで見えていて、それは何とも言えない、悲しい現象、光景でありました。

昭和53年以降、どんどん減少していき、高齢化になってきてやめる人も出てきたりして、その年代に、丹後では土木関係の仕事もありましたので、若い元気な人は、各種の仕事へ外貨獲得に動いていったということです。やめて一円もお金が入らないということから、技術を持っている70歳前後のお年寄りが、日稼ぎの金があればいいということで細々と続けていく家と、あらゆる方面、他方面へ活路を求めて、生活の糧を求めていったわけです。

そうした中で、景気がウナギ上りの30年か40年ごろに、私の家でも丹後ちりめんを取り入れるかどうか、大抵の家はそれはかなり迷って、専業でやって

いる人でも、当時、織機 1 台で米を 1 町つくるぐらいの収入が簡単に上がるし、こんなつらい思いして機械を買ってするよりも、機を 3、4 台入れたらなるではないかということで、一時、みんながそういう方向に動いていくのにひかれて、みんな動揺したものです。

私も昭和 42 年春に、縁あって結婚して、世帯を任されて、どうしようかな、私が踏ん切れば両親も仕方がない、おまえらがやることだったらやれという体制にもなるかとしているときに、母親の弟が丹後町に婿に行つて、そしてどんどん拡張、丹後町でも一、二番の大機屋になって、300 台、出機も 50 軒、従業員は本工場で 100 人前後と。叔父さんも工業組合の常任理事として大活躍して、その当時、歌手の三沢あけみさんが絶頂のときでしたが、このときに叔父や工業組合の者が歌謡ショーに招待しようということで、叔父もそのときが一番絶頂のときでしたので、自分一人で丹後ちりめんの一番いいのをつくって、三沢あけみさんに進呈したということがあったのです。

そうした中で、私もいいなと思って叔父に相談したら、やめておけと一喝怒鳴られました。せっかく專業の道に行つて、今の時期に二兎を追うことはいけないと。家族 4 人で一本で行くことを決心し本腰を入れてということで、專業の道を走っていきました。

当時、私の集落は 125 戸でした。昔から戸数はだいたい一緒です。既存の機屋さんが 12～13 軒あったのですが、その時分に四十数軒、50 軒近いうちが田畑、山を売ったりして方向転換したり、ないうちは親方から機を借りて、織り賃を賃機、機の使用料も引かれてぼちぼちやっていたようなことです。私たち夫婦も、仕方がないということで、3 人の子供の教育も大変でしたけれども、そういう浮気もしないでやろうということで進んできたわけであります。

田家 今は背景のことなので、2 ページの②、発展過程からお話しいただけませんか。

山副 昭和 38 年から 48 年にかけては、全国共通食料増産を訴えたということで、和牛 2 頭のうち 1 頭を手放して耕うん機を導入したということで、昭和 38 年は、先ほども言わせていただいたように、豪雪により麦が全滅により、チューリップ生産拡大方向、水稻も 300a、チューリップ球根は 10 倍アップの規模 30a としていきました。

昭和 42 年は、町内で米五会が 96 名で結成されて、チューリッププラス米生産ということで、大きな柱が 10 年間で生まれました。

2 年前の 40 年には、一番大きい農作業場を建てまして、昭和 42 年に 4 歳下の町内の女性と結婚して、現在になっているようなことです。

就農は、35 年と同時に、両親から財布、通帳、印鑑全てを私に任せてきましたので、よし、これからは 2 人で頑張ろうという気持ちになったものです。

昭和 39 年ごろには、丹後ちりめん産業も農業以上に大いに栄えて発展していきまして、農業で規模が小さい家は水田を売ったり、昭和 49 年から 61 年は、大型機械の導入による球根拡大、49 年にトラクターとコンバイン各 1 台を導入しましたが、2 条狩りバインダー耕うん機も手放さず、適材適所で活用、それによって水稻 400a、チューリップ球根 100a。この時期、弥栄町のチューリップ球根水田生産は 10 町歩、面積販売生産球数も砂丘畑含め 1,000 万球となりました。丹後ちりめんも最大のときに 1,000 万反生産になりましたが、チューリップも 1,000 万球。

私の住む鳥取集落は、他町に先駆けて水田の 1 カ所に 2.4ha 集団栽培に取り組み、伸びは弥栄町一となり、当時「明るい農村だより」で NHK とか民放ラジオ等の番組で取材を受け、私が代表して砂丘畑の数名の方とラジオ出演させていただいたものです。マスコミの影響はすごく近畿一円に広まってきて、毎年 6、7 年、チューリップの摘花の時期になりますと、NHK を初め、民放数社が私のところにお邪魔して収録されて、2、3 分テレビで流して頂いた事が昨日のようであります。

昭和 50 年代、チューリップ祭を弥栄町全体として、農協や町、生産者一団となって 10 年続けました。

昭和 54 年から 57 年は、米をたくさんとろうと。機と同じで、おいしかろうが、うまくなかろうが、とにかく量をとろうということで、2 期 4 年間、会長を務めさせていただいて、皆さんと他府県にも研修に行きました。

昭和 60 年ごろからチューリップが暖冬現象でその時分から冬に雪が少なくなった関係で、環境ががらっと変わり、砂丘、水田ともにウイルスで減少が起きていまして、昭和 61 年、来年からは入植が始まる国営農地での栽培をにらみ、チューリップ専用の植えつけ機、掘り取り機、選別機を導入して、ちょっと違

う角度から球根生産をやらないといけないかなということになりまして、昭和62年から平成4年にかけては、国営農地入植による経営改善、チューリップの病気がひどいので、チューリップ縮小による日本ユリ、西洋ユリを20aの委託栽培をタキイとか大きな種苗会社に委託されて始めました。

平成5年から10年にかけては、平成5年に、とにかく今までの収量をたくさんとれば、味は第二との考えから、こんなことをしたら行き詰まるということで、米五会を解散しよう的决心し、農協の担当と私が中心になって、これからは大きな農家によって量をとればいいという時代から、少しでもおいしい米をとるという稲作部会を結成していこうということになって、97名いたのを一旦全部解散して、やる気のある人ばかり30名の大規模農家に呼びかけて、食味重視の稲作部会に転換していきました。今現在、30名が15名ほどになっておりますが、私もみんな仲間になって頑張って、日帰り研修、1泊研修をしております。

それと、チューリップ生産農家は、いずれ私一人になるだろうという中で、平成8年から最後の会長に就任して、7名の少人数で四国、関東方面の視察に同行しましたが、平成7年から私はヒヤシンス、ボタン、スイセン120a、クロッカス25a、ユリ105a、アマリリス50aを種苗会社から依頼を受けて、法人委託を受け、輸入球根一昨栽培して、それを種苗会社に納入して、10a、代金30万円をいただくというシステムに移行しました。私が一作したのを全国の切り花産地の方が買って、花を咲かせて、切り花として全国に出荷しておりました。

そうした中で、チューリップは28aとぐっと少なくして、国営畑でもどうしてもこれはできない、だめだなということでしたが、最後に種子更新をやろうということで2、3回繰り返しましたが、1～2年のうちに、また元のもすけになって、これはだめだなということでなくなったわけです。

平成10年4月に、丹後農業発展強化を図る目的で、私の集落の山林、20～30mの小さい山ですが、そこを丹後のあじわいの郷ということで、その当時の知事さんなど多数出席して、西日本の大きな道の駅ができて、開園して、周辺地域の景観整備を進める中、90アールの水田が置かれて、私にその景観作物、チューリップ中心のお花畑を作付して協力しろと。でき上がったものは直売、通販ということで農園を計画したわけですが、初めの夢とは裏腹に、あじわいの

郷公園に来る人も思ったより少なく、園内に野菜の直売所「愛菜館」をして、現在も続いているわけですが、そこの部会長もやるということで3年間務めて、いろいろと悪戦苦闘してきたのが昨日のようであります。それもいろいろとスタイルが変わって、今日まで20年、どうにか続いていることでもあります。

そうした中で、地域農業の貢献について、昭和40年ごろより先頭に立ち、積極的にみずから経営展開を起爆材として、富山、新潟、岐阜、埼玉のチューリップ球根産地に視察に行つて、経営転換に頑張ったようなわけですが、昭和50年代、一番若い未熟者が「米を多くとろう」というスローガンで、米価大会、いろいろなこともあわせて、一時は米を12俵2斗とすることも実現はしましたが、やはりこれではだめだということで、先ほども言ったように、同じようなことを2回繰り返すわけですが、いい品質のものということで、弥栄町稲作部会を結成して、このようなことからいろいろとそれぞれ知恵を出し合つて、現在になっているようなわけであります。

そんな中、私たちにできることはないかということで、阪神・淡路大震災のときには、仲間に呼びかけて、みんなが困っているときは、私たちが焼き芋でも持って行って、一番ひどかった長田区に行つて、1,000人余りの方にポン菓子と焼き芋をやろうかと、機械を持ち込んでやったということです。

地域の雇用対策への取り組みとしては、栽培の機械化によって大きく面積拡大に努めてきたわけですが、人力に頼らざるを得ない作業も多く、積極的に地元の人たち、また農業を理解してもらうために、女子高校生たちを10名前後お願いし、アルバイトとして、また一方、70歳以上の後期高齢者の方10人前後にも、私の経営を助けていただいて、今につながっていると思います。

平成5年から町の農業委員を仰せつかり、織物不況による町内の失業率増加への対策として、農業部門での吸収を検討し、活動を展開してきました。

また、弥栄町では、あじわいの郷を活用した観光農業に力を入れています、直売所部会長として活性化にも頑張ってきました。

以上、私なりに地味な活動が周囲から認められたのか、再三再四断り続けていましたが、平成10年度第82回農事功績者表彰を受けて、本当に感無量であつて、今でもいい思い出になっています。全国47都道府県表彰者で、57歳と一番若くしてこの荣誉に浴したわけで、私が代表で答辞を述べさせてもらったこ

とは、今では私の一番の宝です。

平成 11 年から平成 29 年、昨年までですが、平成 7 年ごろ、水田面積、国営畑面積から拡大条件も整い、農業粗収益も急上昇し、1,000 万円台から 1,200 万円、受賞を受けた年は 1,555 万円まで、所得も 900 万円台に乗りました。ユリ、ヒヤシンス、また平成 4 年度からは年々ほかの品目とあわせ拡大して、順調に続いていた球根の委託栽培も、日本ですると人件費が高い。委託料がぐんと安価で済む東南アジアのほうに、タキイさんとか大和種苗、糸井農園がすばっと切って、来年からありませんよということになって、本当にショックを受けたものですが、そうした中で、新しい活路を見出していかなければならないということで、国営畑を減反し、水田において京野菜であるビールのつまみ黒愛菜豆を 20a 作付、秋作も「紫ずきん」、丹波黒を 10a 栽培、充実したさやを一房ずつ手でもぎ、出荷に展開していきました。JA さんにお世話になり、京都市場を主に出荷していきました。

それから、昭和 40 年代半ばから二十数年、イチゴの小トンネル栽培を。その時分では、まだイチゴなどというものをつくったことがない人ばかりで、丹後ちりめんが盛んになって、初めのころはすごい売れ行きでしたが、丹後ちりめんの不況とともに機屋さんがなくなり、売れなくなって、これもいい作物でしたけれども、平成初期にやめてしまいました。

また、正月の花として重宝されていた葉ボタンも、昭和 42 年から国体の 64 年まで丹後中の方に楽しんでもらい、一時はかなりもうかったこともありましたが、始めたときから最後まで 1 株 300 円でしたので、これも自然消滅のような形で、いろいろな作物に挑戦してきましたけれども、こんな感じで、水田は、悪いなりにも平成 11 年度より着実に面積を増やして行って、平成 15 年ころ、480a から 510a 台、平成 25 年には 630a、平成 28、29 年は 780a になりました。

しかし、昭和 53 年、水田利用再編対策第 1 期スタート、2 期目が昭和 62 年、3 期目が 59 年と、米をめぐる情勢は厳しさを増して、多用途米導入 1 割義務づけとか、その上、転作面積パーセントが強化されたり、また、私を初め、米専業農家は四苦八苦の現象が今日まで続いてきているように思い、価格下落とあわせて今までやってきているのですが、ここ数年は小幅に上昇してきて、平成 18 年からは、10a 当たり 7,500 円の国からいただいたお金も廃止になり、来年

から収入保険制度が対応の形となり、私も農事組合の役や農業共済組合の役員もしておりますので、この1年、収入保険制度を勉強して、私も青色申告は40年ほどしているのですけれども、白から青にしないと恩典を受けられませんので、皆さんの先に立って、自分のわかる範囲で努力していきたいと思っております。

そうした中で、平成16年、6町が合併して6万5,000人規模の新市になってからは、農業一筋というスローガンで、私も市議員よりも農業委員で頑張ろうということで今まで頑張ってきているわけで、現在も京丹後市の公報は10年連続で金賞で、本年惜しくも銀賞になりまして、今年の1月24日にはメンバー全員が表彰式に出向いております。

いろいろくだらない話になりましたけれども、最後に参考までに、平成30年度の京丹後市の人口はどんどん減っていき5万5,944人、男性が2万6,885人、女性が2万9,059人、世帯数は2万2,742、外国人が414人、そのうち男性が87人、女性が327人と、いかに女性が多いか、女性に適した働き場があるのではないかと思っている次第であります。

以上が私の拙い経験を通した話ではありますが、答えられる範囲で答えていきたいと思っております。長い間どうもありがとうございました。

田家 どうもありがとうございました。お手元に、冒頭申しましたように、山副さんが旧町の町報を探しに行ってくださいまして、関係する部分がコピーで配っております。チューリップの集団栽培が始まったとか、今日は話がなかったのですけれども、チューリップ組合の山間部にカブラを栽培されたのです。それから、スイス村、町の農業の近代化30年とか、山副さんの話を御理解いただく上で参考になる資料が配っております。

それから、次のところが、国営農地開発の弥栄町にかかわる部分の記事がそれぞれ出ています。

山副さんには、機業の話もしていただいたのですが、なぜお願いしたかという、今現在は、Uターンされたり、定年で戻ってこられて、集落で結構規模が大きい農業をやられている方があちこちにいらっしゃいます。山副さんのように、就農以来、弥栄町では一貫して農業をやってこられた方はなかなかないのです。昭和35、36年の規模を見ると、1戸当たり60aというのが平均的でした。

て、現在、山副さんの場合は10ha 近く。山副さんが田んぼを預かって稲作をやってくれないかという話が殺到していると思いますけれども、恐らく労働力との関係で、今10ha 以内に抑えられておられると思います。

各委員の方から疑問なり、御質問なりをしていただければと思います。

山副 どんな質問でも答えられる範囲で答えますので。

中村 中村ですけれども、山副さんが機業に進出しないで、農業専業をずっと続けられたきっかけは、今お話を伺うと、叔父さんのお言葉が強いという、いわば偶然ですか。それとも、そのお言葉のきっかけはあるのだけれども、やはり山副さんが農業専業でいこうというお気持ちが強かったのですか。

山副 私も農業は余り向いていないなということでしたけれども、父親が、農家に生まれたら農業をしなければいけないと。農業を継がず、よそに行ったら、戻ってくる前にこの家がなくなる。そんなことはだめだということで、私もすごい悩みましたけれども、そうした中で、あの当時、財布を任されて、金はないけれども、おまえが全部やれということで、二十歳時分から、作業場建築から農機具、金の工面は私が全部しまして、途中で挫折してはメンツがないと。やるからには、違う職業についている同年や同じような者たちに負けてなるかという感じで、食らわすという言葉が悪いですけれども、自分があれしただらいかんと。叔父さんが言う言葉も大分誘惑されましたけれども、いかんということで、今になってみると、それは正解であって、そのときふらふらした人も今、農業から離れ、田んぼを売って、一時はよくもうかりましたので、遊びに行ったりして、結末は大したことになるような感じですよ。今はしなかった事が正解だったなと。叔父さんの言うことにも従ってよかったなと思っております。

中村 そうですか。ありがとうございました。

森田 私も続けて同じところなのですからけれども、先ほどおっしゃられた20歳で財布を引き継ぐと言われましたが、これは同じ地域の中でも非常に早いほうですか。

山副 誰もいなかった様です。私は嫁をもらったら、両親が好きなようにしろと。それがすごい英断で、農業をするときは、百姓は百姓だということできついことを言ったけれども、言った側にも責務を負ってやれと。全部おまえに

任せるからと。そういうことで、私もよしやろうかなということになったのです。それが、親がずっと握っていて、40、50 になったら……。そういううちが現在もある様です。

森田 それは、お父さんとかが早く辞めていただいて、農業に決めていただくということもあって……。

山副 それもあったでしょうね。今はそれが逆になって、孫がかわいいので、孫は勉強させなさいと。それぞれ適材適所があるから、これをしたいということは3人の子供にはやらせろと。田んぼでも全部売っていいと。家屋敷はのけて全部教育につぎ込めと。そうした中で、田んぼは当時売られる方がいたら工面して少しずつ買い求め、今でも畑が1町ほど、田んぼは私のときに6反買ったのですけれども、差し引きして2町2反ほどあります。

田家 山副さん、二十歳ぐらいで引き継いだときは、田んぼと畑の所有面積は幾らだったのですか。

山副 1町2～3反でしたね。

田家 当時からすれば、平均よりは大きいほうですね。

山副 当時うちの集落で、親からの引継ぎで私の家も含めて、10軒ぐらい1町前後ありましたね。あとは2～3反ぐらいですね。

田家 今は倍ぐらいの所有になって、あとは借りておられる……

山副 そうです。いいところ、8反ほどは売りました。それを子供につぎ込んだので。

田家 借りているのは、例の農業委員会の許可ではなくて、事実上の請負をやられているのでしたっけ。

山副 過去はありましたが今日では100%農業委員会を通したスタイルであります。

田家 さすが、農業委員だからちゃんとやられている。

山副 全国的には丹後が闇小作が多いらしいです。本当は違反らしいですね。今、京丹後市農業委員会では少なくしていく方向で掘り起こし中であります。

両角 関連して、お父さんの記事が載っていたので。田普請というのですか、相当湿田を改良したと。大変熱心な方だったのですね。

山副 そうですね。私もおやじに似ているような感じですけども、私は足

元にも及びませんでした。うちのおやじは、正しいと思ったら、自分が犠牲になっても人のために働くというおやじでした。私も町会議員に早く出ろと言われてたけれども、子供をちゃんと教育しないといけないということで……。最後一期、町民のために働きたいと思い微力ではありましたが頑張らせて頂きました。この時もおやじの戦後の人助けの恩人、家族がかけつけ7日間お世話になりました。

両角 そうすると、随分早く譲られたのですね。

山副 はい。

両角 お父さんはまだ50代頃にもう譲られてしまった。

山副 そうです。私は父が30歳の時に生まれてますので。

両角 財布もそうですけれども、非常におもしろい。

山副 そうですね、50ですね。しかし筋を通すガンコな父でした。

両角 そういう人も珍しい。

山副 反面物わかりも信じられないくらいありました。だから、私も今までやってきたということでしょうね。いつまでも実権を握っていると、おもしろくないので、やる気がなくなります。

両角 お父さんもまだまだ十分できる時期ですよ。それを息子に譲って、一緒にやられてきたということですか。

山副 はい。脇役にまわり私の出来ないところ、補助してくれました。

小澤 山副さんの場合、順調に経営を拡大してこられたようにお聞きしましたが、それは、お父さんの代から地元での信頼感があって、自然に山副さんのところへ田畑が集まってきて、規模拡大がスムーズに進んだと理解してよいですか。

山副 そういうことは充分あり、父には大変感謝している今日ですネ。

小澤 もう1つ教えていただきたいのですが、今は水田経営に中心を移していますが、相当に様々な作物を時に応じて変えていますね。チューリップの球根から始まって、さらに花の種類も変えている。チューリップの球根を栽培する場合には、種苗会社はその作付けの話を持ち込んでくるのですか。例えば、チューリップの作付が急に拡大していくのは、どのような状況でしょうか。

山副 昭和20年代は麦をつくるか、米をつくるかでした。それが春の花とい

ったらチューリップということで、すごいもうけはなかったですが、価格の変動はなかったです。それで、特産地育成資金で京都府も丹後にはお金を出すと。一方、チューリップを貯蔵しておくところも補助するからとか、地域ぐるみで堅実に伸びてきました。

田家 砂丘地帯がありまして、砂丘地帯は、遠足行くぐらいにチューリップ畑がだあったのです。戦後すぐか戦前かわかりませんが、広大なチューリップ畑がありましたよ。多分それが水田のほうにも入ってきたのではないかと思います。だから、そこはそもそもおっしゃるように、タキイというトップメーカーがありますから、タキイのあれなのか、あるいは系統が勧めたのかちょっとよくわからないのですが、山副さんが就労されたころは、チューリップの産地が水田にも入っていたころではないでしょうか。

山副 やはりタキイさんが、日本の種苗会社では一番大きいですね。タキイさんがすごい力を入れて私達生産者も頑張りました。

田家 タキイが育成した産地ではないですかね。

山副 はい、そうですね。野菜である大根、キャベツ、玉葱……等もそれ以前からタイキの産地でした。

田家 現実にはうちの集落でも、夏休みになったら私はスイカを食べさせられて、スイカの種をタキイで……。今おっしゃったように、1年ぐらいで終わってしまうのです。チューリップは割と長く続いたほうですかね。

山副 そうですね。全集落、あれだけ普及した作物はないです。チューリップだけです。丹後一円の水田地帯でありましたから。バイラス病のまんえんがなかったら今日まで続いていると思います。当然私も大增反の道に進んでいきますヨ。

田家 今はほとんどありませんけれども。

山副 ゼロです。一本もないです。大きな第一原因は暖冬気象 100%ですネ。

田家 見る影もなく。

山副 たばこもたくさんありましたけれども、一本もない。この作物も同様のことが言えるでしょう。

小澤 例えば、球根のチューリップの場合には、富山の高岡の周辺とか新潟の阿賀野川沿いの地域ではずっと続いている。丹後でチューリップ栽培が急に

だめになってしまったのは、病気が原因となっているのですか。

山副 そうです。ウイルス病が大きな原因です。暖冬化で冬に雪が降らないのが一番です。富山、新潟両県もかつては球根生産主体の経営で丹後も日本で3番目の時代もあり、数回普及員、農協指導員と水田、砂丘地の生産農家を訪問して色々研修しました。

吉田 富山と新潟は、チューリップでも切り花なのです。こちらは球根なのです。だから、球根の関係は、今はもうほとんどオランダから入ってきている。だから、新潟とか富山は切り花なのです。

田家 国内で需要がなくなったのかもしれませんがね。

吉田 今の経営の話でいくと、京都は蜷川さんの時代に京都食管というのがあって、全量を転作もしないでやっていましたね。何となく京都は米を全量買ってくれるという形が京都食管の後も続いていましたよね。

山副 ありましたね。私も100%ではありませんでしたけれどお世話になりました。

吉田 京都の米は京都府内で全部……

田家 昭和53年の水田再編の前までなのです。昭和45年から52年まで水田総合利用対策までやったのです。

吉田 その後も京都は、京都食管がなくなっても、府内で何とか流通させることをやっていましたよね。

山副 京都は消費圏で、米を生産しても、全生産数量でも8万tそれが京都府内で全部はける数量で全体として足りないぐらいでした。はっきり申し上げまして。

吉田 はけるから。

山副 はい。蜷川府政のときから、そういう流れがあったのでしょうかね。元々絶対数が不足でしたから。

田家 なぜ京都府庁がやめたかという、蜷川府政のときにやめたのです。水田総合再編のときに面積が飛躍的に伸びたでしょう。結局、限度数量の枠が減ってきて、府の財政がもたなくなったのが切りかえだったみたいです。あそこは余り詳しくないのですけれども、しばらくはやっていました。

吉田 だから、一応転作をやっていても、京都府でつくられた米は京都府内

で全部流通させるようなことをやっていましたよね。

山副 一時そういう動きがありましたね。

田家 今でもお米の自給率が 50% しかないのです。

吉田 だから、そういう面で、平成 5 年で品質を考えましょうというのはどういう契機だったのですか。

山副 嫁さんに行くときでも、ちりめんの着物 3～4 枚はタンスの中に入れて……。ちりめんが少々傷物でも同じように売れたということです。日本人口の増加もあり 1 人当たりの米も一時は今の倍ぐらい消費しましたので、とにかく食料増産の時代は、20 年代から 30 年はずっと。量をつくらなければおつつかないということで、うまくない米でも量がとれればいい。それがだんだんと時代が変わってきて、多様化し食生活もずいぶん変わってきました。従来の米ではうまくない、売れないということで、必然的に方向転換したと思います。

田家 平成 5 年ですから、食管法から食糧法に切りかわったときですかね。だから、計画流通米みたいな。要するに、自主流通米が主体になってしまったわけです。

山副 とにかく不安になりましたね。

田家 ちょっと話が変わりますけれども、せっかく菊地君がいますので、農業委員会が一番進めている農地の流動化、担い手にどう結びつけるかというお話をいただきたいのです。

山副 その人の人間性で、あの人につくらせるのはごめんといって個人を選んだりして、思うように利用増進の集積が丹後では進みません。何が原因と思ったら、他集落の人には何をされるかわからない、自分のものをとられてしまうという観念があるようです。同じ集落だったら、長年つき合っているのということですけれども、2、3 キロ離れた人に貸すということは不安になる様です。

八木 ただ、貸し借りというか、闇小作というか、そういうのは進んでいるのですか。増えているのですか。

山副 増えていないです。だんだんと解消して、農業委員会としても、そういう方向に持っていっているのですけれども、今までこれで通っていたからいいではないかということで、農業委員会ができるだけ見本を示していかないと

いけないので、全部 100%、利用増進に向けて貸し借りはきちっと、今まで 10 年単位になっていきますけれども。それより短い 5 年ぐらいも大丈夫です。

田家 恐らく鳥取地区だけではないですか。その他のところはまだ闇小作というか、請負が主流ですから。

八木 山副さんの経営の今後についてお伺いしたのですけれども、今の規模は奥さんの民子さんとお 2 人でやるのに適正規模ということでもいいのですか。

山副 今の所は健康ですので適正規模だと思いますが、先は不安です。

八木 ちょっと失礼な言い方ですけども、私も 70 代ですが、70 代で収入が 980 万というのは物すごい素晴らしいことですね。

田家 しかもセーブしながらですよ。

八木 しかも、76 歳というのは、言ってみれば後期高齢者ですよ。

山副 マイペースでいきたいと思います。

八木 息子さんが定年退職されるのは何年後ぐらいですか。

山副 今 45 ですから、あと 15 年です。それまではできないでしょう。5 年はいけると言うのですけれども、わかりません。

八木 仮に息子さんがうまく戻られて後を継ぐとしても、これだけの面積を継ぐのは難しいのではないですか。

山副 もう息子は全然だめです。今の時代、農業の考え方、形態もがらっと変わってます。今、45 歳で仮に大学病院を退職してやるとしてでしたら本人の心ひとつで大丈夫出来ると思います。しかし複数の国家試験合格の資格を持っている現在自分の力を発揮したい年代です。かわいそうです。スポーツ分野でも数部門国家資格を取得、2020 年東京オリンピック候補選手数名受け持ち指導しています。まあ仕方ない山副家を 5 代目としてついでくれて十分です。

八木 資料ですと、今、水田が 6 町 6 反で、畑を借地で 5 反やっていますけれども、その場合は、それを返していくということになる。あるいは、どなたかに……。

山副 それはどなたかにお世話にならないと……。うちの集落で今 13 町の人と 12 町の人がいるけれども、私よりも 15 歳ぐらい若いのですので、まだ倍でもいいけると。あるところは、私と同じように 9 町していたのですが、もうだめだと。今年、他人さんですけども、22、23 の人に経営移譲。自分のところの息

子がいるけれども、勤め人なのでやれないと。これからいろいろなスタイルで変わっていくと思います。仕方ありませんネ。

八木 そうすると、これからそういう若い人にかなり面積が集中すると。

山副 やる気のある者でしたら、農業だってやり方によたらいけると思うので、農業学校とか研究機関でしっかり基礎を身につけてやってもらいたいです。

田家 今、問題は、我が田舎の水田については、集落を超えたら実質的な権利関係の移転も含めてなかなか進まないのです。集落を単位にして物を考えると。だから、その気になれば、集落の水田は特定の人に全部集中することはあり得ると思うのです。それをさらに一步、ほかの集落まで、習慣というか考え方が変われば相当規模が大きな農業ができるのですが、今のところは集落を越え、ほかの集落の方にはちょっとと。新規就農の人もちょつととかということで、おいも話していたのですけれども、10ヘクタールの方もいらっしゃるみたいなのです。最近定年で帰ってきて、やはり基礎ができていないから、見るからに荒っぽい米のつくり方をしているみたいです。

山副 今後一年一年情勢が変化し大変な時代に入ると思います。

田家 地権者は、自分ができないから、そういう人をお願いするわけです。お願いするから適当にわあっと、後は恐らくきれいに整地せずに返したり、そういうのをやっているのではないですか。

山副 東京に住んでいる人が不在地主で、30年前は丹後の田んぼの値段が上がって、バイパス近くのもの、いいときに一時2,000万、3,000万したのですが、うちのところは、いいときでも300万円ぐらいしかしていなかったのですが、今では高くても50万円。ただでも要らない現状で、田んぼは今、農業委員会で売買があるのですけれども、値段はあつてないようなものです。中には、親戚や縁故なら、あなたにあげると。今、イノシシとか鹿とかの獣害で弱っていると。将来、子供も後継者としてしないし、今欲しいときに、10万でも20万でも買ってくれというのです。最近イノシシ以上に鹿が増えてきていますので。

坪田 それでも集落を越えて貸そうとはならないですか。

山副 それは時間の問題で、そうなっていきましょうね。

田家 うちの集落などは区長が調整をやっているのだけれども、まずほかの

集落の人に頼みに行こうという話はない。中でやる気がある人、おまえどうかとか、仕方ないなという話で、仕方なしに受けるわけ。仕方なしに規模を拡大するわけです。

坪田 市には行かないのですか。

田家 市にはそんなに行かない。区のところです。

坪田 弥栄町は、町や市との関係は。

田家 市民局があるけれども、ダイレクトだね。農林水産部の農政課というのがあって、農業委員会とか、そっちへ行くのだけれども、事前に集落の中で調整がまず始まるわけです。

八木 歴史的なあれがあるみたいで、江戸時代から鳥取集落という1つの集落としてまとまったのです。自治会の運営もその集落が基本で、直接市に関係して、大きな旧村みたいにまとめて、代議員制の2段階で市に上がっていくような仕組みになっていなくて、ほとんど集落の中で完結的に。

田家 うちの田舎では区というのは。

八木 区の中で完結的にいろいろなことを運営していたという歴史的な経緯があるみたいです。だから、区を越えてほかの区というのは時間がかかると。

田家 だから、国営の土地と全くビヘイビアしてしまうのです。国営は畑など扱えないから大歓迎で、外国人は別にして、北海道から来てもらって、家を用意しましょうとか。

坪田 それと関連して、書き物を拝見していたら、山副さんの経営改善に役立つ補助事業として、丹後国営農用地開発事業と書いてあるのですけれども、実際に山副さんの農業経営に国営農用地開発事業がどのように関係してきたのでしょうか。全く関係はなかったのでしょうか。

山副 どういう面で。

坪田 例えば、それによって面積を拡大するとか、作物を増やすとか、土地を交換するとか、いろいろな関係があったのか、ないのか、その辺はいかがなのでしょう。直接はなかった……

田家 今までチューリップとか、球は水田の一部を使ってつくれたのだけれども、国営は畑ができたから、水田でやっていたものを畑に持っていけたという面があります。そういう理解でいいのですか。

山副 そういう面もあるのです。干ばつの年は、水不足でいいものがない。水田のほうがいいなというときもありますし、作物によっては、畑よりも水田向きの作物もあります。

田家 山副さんみたいに、お米もやり畑もやるというのは珍しい例なのです。水田単作地帯なものですから、本格的に畑作をやっている人はいないわけです。だから、国営農地開発の畑、1 ha、3 反区分みたいところで、あんなところ、できないはできない。だから、水田もやり、すぐ畑もやりというのは、丹後では特異な方なのです。そういう意味では、国営農地開発が意図した地域の農家で経営規模の拡大につながったというのは珍しい例なのです。

国営の農地開発の多様性というか、換地をやっていないのです。3 反区画がある。私なども大勢の地権者になっているわけです。3 反区画の中には地権者がいっぱいいるわけです。それを全部管理公社に預けるわけです。管理公社がまとめて貸すと。要するに、所有権と利用権を分離しているわけです。だから、今の山副さんの資料も、50a 借りて、1 ha を人に貸してあるというでしょう。だから、山副さんが農地を持っていच्छやるところは離れていच्छやるのではないかと思います。それは人に貸してあるわけです。人に貸するのが前提で、管理公社が耕作者を決めるのです。

八木 現地換地みたいに近い。元持っていたところに所有権を。

田家 そうですね、所有権をそのまま。だから、農地を集団でやっていないです。通常の換地は田寄せ、畑寄せして集団がまとめてはかるでしょう。それをせずに、山林の地権者がそのままいるわけです。

八木 何でそういうあれで、交換分合とか……

田家 所有者の山林の区画枠の規模が小さかったのでしょう。せいぜい反のあたりが集まっています。だから、ざばっとやると何百人という地権者がいるわけです。そんなことを一々調整していたら大変で、農地管理公社に預けてしまって、3 条事業資格者でしたので。

小澤 山副さんの鳥取地区などの場合ですが、理事長の場合には、家を継承するのは難しい状況ですね。

田家 地域からすれば、私などは落第坊主なのです。大学に出すなどけしからんというのがうちの田舎のほうなのです。大学に出してしまうと帰ってこな

いと。

八木 定年退職して帰ってきててもやらない。

田家 山副さんなどは親が立派なのです。おまえ、継げと。大学などけしからんと。こういう方がしっかり……。だから、見ていると、何代にわたって家がしっかりとして維持されているのは、山副さんみたいな……。今、息子さんはちょっと問題があるけれども（笑声）。

小澤 地域では家は何割ぐらいが継承されていくと思いますか。

山副 丹後、私の集落も含めて？

小澤 ええ。

山副 多くて2、3割でしょうね。大きな経営をしていても、跡継ぎがいなのが現状です。

田家 ほぼゼロと思ったらいいのではないですか。

小澤 家として2～3割しか残らないということですか。

山副 後継者ですか。

小澤 農業をやらなくて、自分のところの農地を貸すという形でいいのですけれども、家、屋敷をきちんと管理していれば、家として継承され、その家は地域に残っていくと理解される。しかし、そうはならなくて……

田家 今、どんどん空き家になっていくと。

山副 空き家になっているというのが現状です。1割はありますね。今後はどんどん増えていきます。

田家 2、3割はもう帰ってこずに、私の家も含めて周りは全部空き家ですから。

山副 今は限界集落が消滅集落になると言っていますものね。本当にさみしいです。

八木 失礼ですけれども、田家さんの将来を見ていくとわかると（笑声）。

田家 私などは早く都内に出ていってしまっ、山副さんなどは地域をずっと守られて、農業、あるいは集落の維持、いろいろな役を分担されて、その継承がどんどんなくなってきているのです。

吉田 丹後地域は何度か行ったことがあるのだけれども、ちりめんの企業がなくなると、本当に働く場所がないのです。だから、農業をやるか、観光業と

か何かをやって、あとはちりめんの機が一部残っているけれども、ないですものね。

山副 ちりめんの景気がいいときは、丹後中が潤っていました。銀行から、お店屋さんから、農家もちろんですし、あらゆる職業の方々が恩恵に浴してましたね。

田家 だから、景気がいい機屋さんから見れば、高校に行くなどはばかだと。高校を出してどうなるのだと。出して、すぐ機屋をやらせたいと。1台が1町の値打ちでしたので、高校を出すなど。同級でも、結構優秀な女の子もすぐ働きましたから。

両角 景気がよくなったのは、昭和30年代ですか。

山副 そうですね。

両角 30年代から48年ぐらいまでの20年ぐらいしかいい時は続かない。

山副 49年はオイルショックで、その辺からがたがたと。なだらかな下降線ではなしに、極端な現象で、ハンマーでたたき割って……鉄クズ化して悲しい思いになりました。

八木 全国でもそうですよね。農村工業化がずっと進んでいって、例えばメリヤス工場とかが入ってきて、結局、昭和50年ごろに海外に。

田家 それは典型的なあれだね。それが一気に、西陣という大きな産地が、出機みたいところで、京都及び京都周辺の家内工業が全部丹後に来たのです。それで一気に広がったのです。

小澤 70年代前半頃を契機として日本社会が全体として服装から始まって社会生活のあり方、生活様式が全面的に変わったということなのではないかな。

山副 そういうことは言えますね。

両角 すると、絹織物は海外で生産をしてしまったのですね。

山副 はい、そうですね。

小澤 でも、ちりめん類の需要がもうなくなってしまったでしょう。

田家 和装離れというのですか。

八木 2つほどいいですか。1つは、昭和35年に和牛604頭と。これ、役畜だったと思うのですけれども、この和牛さんたちはほとんどいなくなったと。要するに、畜産として農家は残っていますか。

山副 残っております。和牛の繁殖経営とか和牛の肥育とか。戸数は大変少なくなってきました。

八木 水田が中心になっているのですけれども、畜産も……

田家 4戸とか、それぐらいの規模でしょう。ごくわずかですね。

山副 わずかです。こんな変わり様信じられませんね。

八木 繁殖ですか。

田家 肥育もですけれども、数えるぐらいの。

山副 乳牛もほとんどなくなりましたしね。私の町では一戸だけになりました。40数頭ですかね。

田家 残っているのは、久美浜の有名な平林牧場。

田家 東京のお店にヨーグルトなどを売っていますよね。

八木 かなり規模が大きい……

田家 乳牛のほうはそうではないですか。肥育のほうはまだ少ないのではないですか。

八木 あと一点は、このスイス村というのはどういうものなのですか。

山副 スイス村は誰がつけたかといったら、私も何回か言わせてもらったのですけれども、森岡行直さんという方です。あの人はもともと機の出ですけれども、35、36歳から町会議員に出て、42歳で町長になった。あの人は行動力のある人で、蜷川府政のときだって、「あれはどこの町長だ」と。何回でも来れば、犬でも猫でも憎いものでもかわいくなって、仕方ない助成をやるわいと。成功それで味をしめて、国のほうにも行き来して、景気のいいときはあちこちから金をとってきて、町長を2期も3期もやったら、だんだんと地盤が固まってきた、顔が売れてきて、そういうことで集団離村したところはスキー場にできるなということで、スイスに行って、スイス村と言って、スキー場と言ってつけて、あのときには高度経済成長と相まって、丹後6町の中で一番小さい町だったけれども、そのような助成金を国や府からどんどんとってきて、有言実行そのもの、あの人は名声を博しました。

田家 説明すると、スイス村というのは野間地区なのです。丹後地区で唯一の振興山村地区なのです。山村振興事業を使ったのです。高校の合宿所をつくったり、平安女学院なども林間学習があったのではないですか。それから、ス

スキー場もつくって、林野庁の縦貫林道が走っていました。山村振興事業をうまく使って、どんどん公共事業を導入されました。今もちゃんとスキー場があります。

山副 今年も昨年より多くの積雪で 270cm に……。スキー産業も斜陽化していますので、いま一ですけれども。今年も京丹後住民、周辺のスキーヤーが参加するスキー選手権が当初よりずっと続いていますよ。

田家 時々行きますと、まだありますから。

山副 今、雪が 260cm あります。

田家 京丹後市のホームページを見ると、ライブで積雪状況を映しています。

吉田 スキー場が赤字になると大変だよな。

山副 これ、昨日の新聞に、全国の主要なスキー場ということでスイス村が出ております。とにかく、そういうものに目をつけたわけです。ぐあいよく事業に参加して、森岡町政はとれるものはとってきたということです。しかし現実には厳しいですが、廃業だけはしないで……。住民が 1 回でもスイス村スキー場に足を運んで頂きたい。願いです。私は 2～3 回いきます。

田家 農林省時代によく来られましたよ。

山副 元気だった。あんなに全力投球して町政に邁進していたのに、あつけない死でした。80 ぐらいまでいくと思ったのですけれども、たしか 70……

田家 機屋さんでしたっけ。

山副 機屋です。私の隣の集落です。

田家 菊地さん、何かお聞きすることは。

菊地 山副さんが今までの農業の歴史を語られた中で、水稻とチューリップ、チューリップが傾いてくると、スイセンとかさまざまなお花とか野菜を導入されて経営を展開されてきたのですけれども、そういうさまざまな作物を導入するに当たって、農業の基本である技術とかそういったものはどうやってマスターされたのかなと。

山副 球根でしたら、チューリップは共通のところがよくあります。チューリップはチューリップ、アイリスとかクロッカスとかヒヤシンスとか、基本は基本で多少は違っているのですけれども。自分の知恵と併せて試験場、農協、普及員の方々に指導願いました。毎日毎日が勉強という心で沢山の方々から知恵

をもらいましたね。

菊地 それはタキイさんとか、そちらのほうからですか。

山副 はい、私はタキイさんにもよく足を運びましたし、タキイさんのことでチューリップの生産にもいろいろと協力しましたので、あなたには任せる、ほかの人には任せられないと、3町全部、丹後でいうと私一人だったのです。それで球根のつくり賃が1,000万円ぐらいになりました。1反つくったら30万円でしたので。安い肥料でいいから、一時は米の販売と合わせて2,000万円を突破したことがありました。

坪田 そういう技術はどうやって……。御自分で習得されたのですか。

山副 農協や農業試験場はありますし、そういうところに出向いて教えてもらったり、行けばそういう研究機関の人はやさしく教えてくれ、私にとってはすごいラッキーだったです。今では感謝感謝の心です。

田家 3町もつくるのは大変だね。

菊地 今も7、8haを経営されていて、頼まれてやっているほかに、弥栄の中で10haやっていると、13haやっているという方がいらっしやとおっしゃったのですが、その方々の経営は水稻のほかに、野菜とか複合経営でやられているのですか。

山副 やられています。大根とかカブラとか余り手間の要らない、つくるのは1町ぐらいです。大きな機械を入れて、私たちよりも経営形態、規模が全然違います。機械の台数もケタ外れに多いですよ。

菊地 年齢は50歳代とかですか。

山副 そうです。私よりも15、16若いですね。

菊地 同じ町の中の生まれ育ちの方なのですか。

山副 そうです。若いですし、心技体3拍子そろったすばらしい人間です。

田家 鳥取の方ですか。

山副 鳥取の方です。機が悪くなって、大きな機屋さんをばっと切りかえて、百姓も何も縁のなかった人で、やれるのかとみんな注目していたのです。何の心配もなし真剣になってやって、大勢の先輩からの教えに耳をかたむけ技術もしっかり習得できたし、その夏子さんも今34歳ですけれども、お父さんがしなくなったら、国営プラスお父さんがしている13町を私がやると言っています。

それが弥栄町のトップです。

菊地 山副さんから見てみると、そういう 30 代の方がぼつぼつとは見えてきているのですか。

山副 はい。そういう人は私が取材して、京丹後市で農業している人、月給取りも含め 5 万 5,000 人余の全戸に京丹後市農業委員会だよりを配付して読んでもらっています。ほかのところへ行くと、農業者しか配らないところや、集落にちょっと配って、それを見てくれということだけれども、京丹後市は全域に配布します。それによって、あの人はやっているなということで協力体制も出てきます。そういう人がいたら、私を始め数名が取材を受け持つので、その人を持ち上げるようなことを書くと、やる気を出していきます。私はこれが原点の一つになると自負しています。

菊地 地域全体の中で農業をやる人を育てていくというのはいいですね。今のお話は、結局農業の中だけではなくて、農業以外の方も含めて農業委員会さんが情報提供されて、その中で次を担う若手の農業者を支援していこうという感じですね。

山副 はい。ありがとうございます。良いアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

菊地 とかく、担い手というのは農業会だけで考えてしまうのですよね。

山副 そういう小さい範囲ではだめだと私は思うのです。ほかの産業も共通していることですが、関係の人ばかりで集まっては考えも大体固まってきて、いい面もあるのですが、いろいろな人が見て下さって、また変わっていきますので、農業をしている人が、違う産業についている人から、ああ、ということだなといってヒントをいただくということで、あらゆる人との交流がこれからは必要だと私は思います。

岩手県北上の西部開発の照井耕一さんに頑張ってますかと電話したら、体調を崩して昨年 6 月にバトンタッチしたとのことで、息子が 45 歳で全権を引き継いだと。15 年前初対面で一泊した時、個人で 420 町歩やっていました。それが 500 になり、600 に。平成 29 年の去年は 820ha。すばらしいと思いました。この冬は日本列島大雪で訪問予定が不発に終わりましたが、1 年以内に同世代でもあり是非おじゃまして色々と体験談をお聞きする予定であります。

田家 もう引退されたのですか。

山副 去年6月に引退しました。今はもう悠々で、何も携わっていません。あの人は日本で面積が一番、和牛肥育も300頭、昨年10月にはステーキハウスをオープンしたとのことですよ。

田家 肥育もやっていたんですか。

山副 肥育もやっている。それと大豆も3町歩やっている。私も3回ほど行きましたけれども、すごいことをやっていますね。すばらしいとしか表現がありません。

田家 中村さん、どうですか。

中村 先ほど、機業に進出せずに、今や大規模農業経営をやっていたらというお話をされたのですが、私がこの機会に伺いたいのは、機業の大ブームがあって、あるとき、いろいろな事情でがたんと落ちて、大混乱が起きましたよね。立ち直った方もいらっしゃる一方で、なかなかそういうわけにできなかった方もいらっしゃる。

お伺いしたいのは、そのような予期せぬような大きなことがこれからも起きないとも限らないのですが、機織り業界をめぐるこういった大きな変動を、今にして思うと、よそから見ていて、これだけ大きな混乱が起きないで済むのに何かいい方法があったのではないかと。今後の教訓として、何か1つ、2つありますでしょうか。

山副 実際に機業に携わっている方でも、私たち横目で見ていた者にとっても、私たちに命がある限りは、多少の浮き沈みはあるけれども、こんながたんといかない、ずっといくだろうという考えをほとんどの人が持っていたということです。初めての経験で考えが甘かったのでしょうか。

中村 ということは、この間の日本のバブルと同じように、弾けるなどというのは考えもつかなかったということですか。

山副 そういう感覚で仕事に携わっていた人が多いのではないですか。立場を変えて私でもそうだと感じます。

中村 この機業のブームが弾けたときに、立ち直った人と、なかなかそうもいなかったということの分かれ目がどの辺にあるのでしょうか。

山副 今の人は黒字倒産というか借金がなくて、農業を始めるときでも、借

金ゼロで機械を全部そろえている方です。しかし大半は転業へと移行しました。

中村 やはりやる気というか、その意志ですか。

山副 はい。やめられて負債が残ったわけで、有頂天のときに相場に手を出して、反対に3,000万いかれてしまったわけです。

中村 ということは、農業経営というのは、最終的には本人のやる気ですか。

山副 そうですね。しっかりと基準、基本、応用を先ずベテランから低い姿勢で学ぶ事が大切です。

中村 何か行政が手を差し延べても、それは補助だけでも、やはり最後はやる気のある人をどうやって育てていくか、でしょうか。

山副 行政の手助け、御指導、面倒見も大事です。いくら本人が頑張っても、行政が横にいたり、かかわってくれなかったら、いくら努力したって個人の力は知れたものですが、それプラス、仕事に携わる人が真剣にやるという決意を持ってやらなかったら、いいかげんにやるということでは、いつかは弾けてしまうような感じになるでしょうね。それはどの仕事にも言えることだと思うのです。

中村 山副さんのようにやる気のある人をどうやって育てていくのですか。

山副 自分で言うのも何ですが、小さいときからの親のしつけと、親が1つのことに取り組んだらやるという、何気なしに背中をみて育ったので、私には自然身についたと思います。しかし今、過去を振り返ればまだまだ不十分、60点かなと正直な所です。

両角 細かいことで恐縮です。最初に2.4ヘクタールほどの集団栽培のお話がありました。集団栽培は、その後、結構発展していったのですか。

山副 発展しました。そこに田んぼを持っている人に、そっちに田んぼを提供するのでかわってくれと言って現物交換してもらいました。やはり集団でまとめて1ヵ所にすれば、消毒にしたって、いろいろな面で作業でも、やはりしなければということになって、みんな歩調を合わせて、それぞれの作業が滞りなく進められます。出来上がった球もよくそろい品質が一定になり切り花産地からも高い評価を頂きました。全員チューリップづくりをやめるまで最後まで続けました。

両角 まだ拡大しているのですか。そちらの集落に45町歩ぐらいありますよ

ね。そういうところは集団栽培はどうですか。

田家 そこは引き続き畑地利用されているのですね。

山副 今はチューリップはなくなりました。また元に戻り水稻単作です。チューリップの花一本も見られないので、約 30 年続いたチューリップ栽培も過去と化し寂しい限りです。

田家 最後なのですけれども、来年のテーマでもあるのですが、山副さんの御経験からいって、今後、鳥取の農業、弥栄の農業、地域の農業はどう展開していったらいいかと思われますか。

山副 私は年も年ですので、健康で、ちょっと無理になったら、やろうという人に預けて、そして今までの経験を生かして、みんなにこうしたらいいという助言をして、集落、京丹後市全体を、みんなが協調性を持って農業に取り組んでいける和を大事にした、心を統一していくのが私の役割だなと思っているのです。

田家 私は、京丹後市総合計画審議会の会長をしているのですけれども、総合計画を考える場合、農業はどう位置づけて、どういう展開を考えていったらいいかどうかということなのです。

山副 丹後は、全ての産業に色々とあらゆる角度から肉付けしていくべきだと思いますね。それには各分野の人々が若い人から老人の方々が心を一つにして色々の産業分野でバランスのとれた形を作るべく知識人も入れて頂いて、丹後特有の総合計画を作ってもらいたいと思います。また、外に向けて丹後発信、大アピールを例えば丹後出身有名人太川陽介さんに観光大使になって頂き総合的に全国キャンペーン等も各団体のアシスタント同行で展開していくことが京丹後市全体をがらりと変えていくヒントだと思い大金を四季分括して動く事が必要だと考えます。市民が納得する金の使い方であれば誰一人反対もないと思います。

八木 山副さんが地域をまとめているときに、山副さんのこれまでの御経歴ですと、もう顔でいいのではないかと思うのです。ただ、組織として何かまとめるとしたら、いろいろな肩書きの中で一番有効に使えるのは農業委員会なのですか。農業委員会が頑張って地域をまとめていくということですか。

山副 私は微力で超高齢化していますが、農業委員会の果たす役割で、一昨

年から京丹後市は国の方針改革の下で半減されて、補佐的に推進協力員と一丸になって、55 名が月 1 で合同の会議を開いて、農業委員会が終わった後で、それを 6 つの町で主に夜会合することが決まり必ず開催で、農業委員の果たす役割、協力員の果たす役割は今まで以上に重みのあることですので、頑張っていかなければと思っています昨今です。

報酬は、農業委員さんが 1 年に 24 万円、協力員が 20 万円です。4 万円の違いですけども、協力員も大変です。どちらも重要さは同じ比率です。みんな一緒に同じ土俵で頑張っていこうと意志統一、たまには飲食も割り勘じょうで楽しくやっております。

両角 鳥取集落が 145 戸かありますね。少し減っているとのことですが、減っても、例えばせいぜい 6、7 割ぐらいまでに止まって、しばらくはこれでいくという感じですか。それとも、もっとぐっと減ると見込まれますか。消滅集落もあるとおっしゃっていましたがけれども。

山副 日本全国の現象といいますか、いかなる局面でも人口が減るということは寂しいですし、大勢の人間がいてこそ、集落なり地域が成り立っていくと思うのです。丹後でも限界集落ではなく、ちょっと小さいところは消滅集落と言われる方もおりまして、困ったものです。しかしみんなで力を合わせ鳥取集落も 7 割止まりでいきたいと思います。老人が亡くなって若い人が学校卒業したら都会へ職を求めて村を後にする。私にも良いヒントはなく私の子供も 3 人とも都会へ責任を感じています。Uターン、I ターンを私の子も含め積極的に取り組みたい。それには両親の健康長寿（母 87、父 97 歳）より上を 100 歳以上を元気にを目標に日々マイペースで歩んでいきたいものです。

田家 では、長い間どうもありがとうございました。

山副 余り参考にならない意見でまことに申しわけありませんでした。

田家 なお、29 年度の委員会はこれで終わって、来年はしかるべきとき、できたら夏の前に再開しようと思いますけれども、それまでの間、物を書かなければいかんと思っています、またいろいろと御協力よろしくお願いいたします。

——了——

私の農業経営の足跡

山 副 孝 雄 （昭和 16 年 6 月 21 日生）

76 歳 8 ヶ月（2 月 5 日現在） 4 人兄弟の長男として誕生

京都府京丹後市弥栄町鳥取 2006 番地（旧京都府竹野郡弥栄村字鳥取 2006 番地）

農業経験年数：58 年

家族の概況：私と妻（民子 72 歳）の二人

経営は畑作、水稻の二本立複合経営

経営面積：水田 780a(借地 660a)

国営畑 50a(借地 50a) *造営国営畑 100a 貸し付している

作付面積：京野菜 50a

水稻 700a(80a 保全かんり)

施設、農機具所有状況

農作業場 3 間×6 間の二階建(昭和 41 年築)

格納庫 3 間×6 間の平屋建(昭和 50 年建築)

トラクター 2 台(35 馬力、25 馬力)、田植機 5 条植 1 台 乾燥機 65 石 1 台、
粃すり機 4 インチ 1 台、代掻ハロー(2 m 鋸) 1 台、背負い草刈機 2 台、自走式
草刈機 1 台、畔つけ機 1 台、動墳 2 台、動力散布機 2 台、うんぱん車 600kg 用
1 台、歩行型耕耘機 1 台、軽トラック 2 台(小型)

農業経営改善に役立った補助融資事業

- ① 丹後国営農地開発事業 昭和 62 年入植
- ② 農地取得資金 昭和 50～60 年 3 件
- ③ 農業改良資金(平成 5 年チューリップ球根の更新、田植機乗用、球根各種機械)

以上が今日の状況と言いますか実態であります。

それではこれからこの世に生を受けてから今日までの流れを話していきたい
と思います。

1887 年（明治 10 年）12 月吉日

本家 山副七左エ門より次男として分家（嘉永元年 1 月 8 日生）

当人利右エ門と二代目分家 太右エ門の長女たみ（安政 4 年 2 月 17 生）と従弟どうしで所帯をもつ。

私は 4 代目です。戦前生れですので昭和 20 年前後は鮮明に覚えています。

私の父親は戦争に兵隊検査、甲、乙、丙不合格でした。10 代の頃、力持万能スポーツ草刈大会、陸上、スモウ、柔道（黒帯）カツヤク。栄養失調肋膜炎になり医者からもう駄目だとつき離され丸 4～5 年（フラリフラリ）魚釣り等趣味を生かしてキセキ的に完治、昭和 15 年 29 歳で 25 歳の母と結婚、私が昭和 16 年長男として生れました。

農業に本格的に取り組んだのは高校を卒業して昭和 35～36 年でした。この道は向いてないのか余り好きな職業ではありませんでしたが「百姓の子は百姓」だとの一言で仕方なしに……。その頃の年代は一般的な風潮でしたネ 農大の夢を断念したかわりに東京農業大学の通信教育年 2 回上京してのスクーリングもこなし第 60 回生として無事卒業「よしやらなければ」ということで、昭和 36 年京都府主催第 4 回国内研修 14 日間男女 10 名づつで関東方面を農業実習中心に各分野勉強しました。その後は青年団活動、又専業としている農業クラブ 4 H C 加入、毎年全国各地に出向いて勉強、今日まで継続今の私があるのは全国の同志皆さんの御陰と感謝している所です。年賀状も 30 数年やりとり個人的に行き来して交流しております。

① 昭和 35～37 年（食料増産、2 頭の牛の力利用）

高校卒業と同時就農：水稻 120a、麦 40a、チューリップ球根生産 3a

昭和 32 年に本町、農協生産者一体となった花卉球根組合部会が 150 名の農家によって発足、当時新規作目として注目された。

② 昭和 38 年～48 年（全国共通、食料増産と機械化）

和牛（役牛としての）一頭手放し、中型耕耘機導入第一歩でした。

昭和 38 年百年に 1 度とも言われた豪雪により麦が全滅によりチューリップ生産拡大方向、水稻 300a、チューリップ球根 10 倍アップ規模 30a へ

昭和 42 年 町内で「米五会（べいごかい玄米を五石とる）組織が 80 余名」で結成され、チューリップ、米で大きな 2 本の柱が 10 年で生れました。

2年前の40年父母を説得して125戸集落で一番大きい農作業場2階建を建築。周囲のすすめも加わり昭和42年3月26日(吉日)町内の4歳下の女性と見合い結婚しました。

就農(35年)と同時に両親から財布、通帳、いんかん全てを私にまかされて来ましたので「よしこれからは二人でがんばろ」という気持ちになったものです。

この頃の年代は丹後チリメン産業も農業以上に大いに栄えて発展して行きました。

③ 昭和49年～61年(大型機械の導入による球根拡大)

49年トラクターとコンバイン各一台導入しましたが、二条刈バインダー耕耘機も手放さず、適材適所で活用、これによって水稻400a、チューリップ球根100a規模、この時期弥栄町のチューリップ球根水田生産は10ha面積販売生産球数も砂丘畑含め1,000万球となりました。

私の住む鳥取集落は他町にさきがけて水田の一カ所に3ha弱集団栽培にとり組み伸びは弥栄町一となり、当時「明るい農村だより」でNHK、民放ラジオ等番組で取材を受け私が代表して砂丘畑の数名の方とラジオ出演させて頂きました。

近畿一円に広まって来て毎年6～7年チューリップ摘花の時季NHK初め民放数社が私宅におじゃまして収録テレビに2～3分流してもらったことが昨日の様です。

昭和50年代チューリップ祭を協会、JA、町、生産者一体となり10年

- ・昭和54年～57年 米五会の会長 4期務める
- ・昭和60年頃からチューリップにウイルス病が多発、生産農家、面積ともに減少の一途をたどる
- ・昭和61年 来年から入植(7人)が始まる国営農地での栽培をにらみチューリップ専用の植付機、掘取機、選別機導入

④ 昭和62年～平成4年 国営農地入植による経営改善、チューリップ縮小による西洋ユリ委託栽培20aに転換

⑤ 平成5年～平成10年 平成5年にとにかく今までの収量を沢山とれば味は第2との考えから米五会を思いきって解散しようと決心し実行。農協の担当と私が中心になって30名の大規模農家に呼びかけ量から食味重視の稲作部会

を結成リーダーとして平成 6 年まで 2 年間会長を務め、その後はオブザーバーとしてがんばり、全国知り合い農業者、数回一泊研修

- ・チューリップ生産農家は私一人にいずれなる方向となる状態の中で、平成 8 年からは花卉球根部会の会長に就任 7 名の少人数、四国、関東方面視察同行

- ・平成 7 年から私はヒヤシンス 50a、水仙 120a、クロッカス 25a、ユリ 105a、アマリリス 50a、種苗会社から依頼、個人で委託をうけ輸入球根一作栽培、そして種苗会社納入、10a 作り代金 30 万円頂くシステムに移行

- ・チューリップは 28a と減少、国営畑駄目水田での転作部門と位置づけ種子更新(富山県より買い入れ)、くり返し病気のない高品質生産に心がけた。

- ・平成 10 年 4 月 丹後農業発展強化を図る目的で私の集落の山林切り開いて「丹後あじわいの郷」西日本一として開園、周辺地域の景観整備が進められる中、90a の水田を借り峰山改良普及員指導の下、チューリップ中心のお花畑を作付けし協力する。花き球根の直売・通販や隣接する 40a の調整水田に体験農園を計画した。

- ・あじわいの郷公園内に JA 直売所「愛菜館」を設置、農家の農産物を販売の部会長を 3 年間務め丹後の参加農家の掘り起し等のまとめ役として多数の会員さんの協力で活動させてもらいました。

＊地域農業への貢献について

- ① 自ら経営転換を起爆剤としてチューリップ球根産地から多品目花き球根産地へ経営転換に少しは貢献した様に感じる

- ② 昭和 50 年代一番若い未熟者が米を多くとろうスローガン

玄米 12 俵 2 斗の米五会の会長 4 期務め目標達成時代が変わり量から質へ米五会解散後、農協担当と二人して農家有志による「弥栄町稲作部会」を結成

初代から 2 期部会長を務め省力化や良食味への取り組みとして水稻の青空教室を開催したり又毎年先進地大農家の県外研修に日帰りや一泊で会員と同行、又阪神淡路大震災時には直後仲間に呼びかけボン菓子、焼きイモを 4 人で機械道具をトラック乗用車にのせ長田区の長田小学校グラウンドを借りて、1,000 人余りの方々に食べて頂き喜んでもらいました。

- ③ 地域の雇用対策への取り組み

- ・栽培の機械化によって大きく面積拡大に努めてきましたが、人力に頼らざる得ない作業も多く、積極的に地元の人達又農業を理解してもらう為に、高校生(女子)に十名前後お願いし、私の経営を助けて頂きました。

- ・平成5年から町の農業委員をおおせつかり、織物不況による町内の失業率増加への対策として、農業部門での吸収を検討している。

- ・町では「丹後あじわいの郷」を活用した観光農業に力を入れていますが、直売所部会長として地域の小規模農業の活性化にがんばりました。

平成10年度(1998) 第82回農事功績者表彰式

平成10年11月20日(金)午前11時～午後1時20分

石垣記念ホール(三会堂ビル9階) 総裁桂宮宜仁親王殿下

桂宮宜仁親王殿下ご来臨のもと全国各都道府県から晴れて参集の農事功労者の一人として表彰頂き本当に感激しました。

その上、答辞は今回受賞者の中で一番若い最年少57歳の私が代表して今日の喜びと今後の抱負を述べさせてもらいました事、この上ない名誉な事でした。式後一同は屋上において記念写真を撮影しました。

受賞祝賀パーティーは午後12時15分参列者が入場し、会長あいさつ後、本会功労者岸氏の音頭によって乾杯が行われた。私は八つのテーブルのうち複合経営部門の席で殿下に「おめでとう……。」色々声をかけて頂き天にも昇る境地でございました。

⑥ 平成11年～平成29年(2017年)

平成7年頃水田面積 国営畑面積から拡大条件もとのい農業粗収益も急上昇1,000万円台から1,200万円、受賞うけた年は1,555万円まで所得も900万円台にのりました(ユリ、ヒヤシンス、平成4年導入より年々品目と合せ拡大)。順調に続いていた球根委託栽培も委託料がぐんと安価ですむ東南アジアに種苗会社が転換してスパットゼロとなり粗利益も減少、国営畑を減反し水田において京野菜であるビールのつまみ黒愛菜豆を20a作付秋作もムラサキズキン黒豆丹波を10a栽培充実したサヤを1房つつ手でもぎ出荷に転換していきました。

又昭和40年代中ばから20数年イチゴの小トンネル栽培も丹後チリメンの不況と相まって売れにくくなり、平成初期やめました。そして正月の花として重

宝され人気のあった葉ぼたん栽培も昭和 42 年より国体の 64 年まで丹後中の方に楽しんでもらいました。

一方水稻は平成 11 年より着実に拡大、平成 15 年頃 480a～510a 台、平成 25 年は 630a～、平成 28、29 年 780a になりました。

しかし昭和 53 年水田利用再編対策第一期スタート、二期目 56 年、三期目 59 年と米をめぐる状態はきびしさを増し、多用途米導入 1 割ギムづけ、その上転作面積パーセント強化等、私始め専業米農家は四苦八苦の現象が今日まで価格下落と併せて続いています。

京丹後市たんじょう平成 16 年 4 月までは弥栄町として最後の数年任期弥栄町議会議員として島根、山口両県又岐阜県に合併勉強会と農業研修に卒先して微力ではありますが努力精進しました。

六町合併 65,000 人規模の新市になってからは一部市議会委員はと声をかけられましたがことわり、農業一筋というスローガンで新農業委員になり、今日まで農政部会、農地部会、公報委員としてメンバーにさせてもらっています。

公報は年 4 回発行 10 年継続金賞、本年は惜しくも銀賞 1 月 24 日にはメンバー全員、研修併せて表彰式に京都市内に出かけます。

以上ただら、とりとめのない文章内容となり誠に申し訳ございませんでした。

もれ落ちた項目多々あると思いますが、当日の 2 月 5 日会場で答えられます範囲でお話出来ればと考えておりますのでどうぞ宜ろしくお願い申し上げます。

追伸、私達夫婦も道あり谷ありいろいろありましたが昨年 3 月 26 日をもって結婚五十周年、東京帝国ホテル 3 泊 4 日で 3 人の子供と家族にして頂き、長女が勤めている都庁、スカイツリー、あさくさ、皇居……等々楽しくすごしました(3 月 19 日、20 日、21 日、22 日 日程で)。

二人仲良く残り少い人生楽しみたいものです。

私の農業経営の足跡—山副孝雄—（地域農業事情に関する研究会報告その1）
平成 31 年 3 月、B5、48 頁。

私の農業経営の足跡—山副孝雄—

平成 31 年 3 月 印刷
平成 31 年 3 月 発行

編集・発行 公益財団法人 日本農業研究所
本 部 東京都千代田区紀尾井町 3 番 29 号
電話 03-3262-6351 〒102-0094
FAX 03-3262-6355

実験農場 茨城県つくば市稲荷原 2-1
電話 0298-76-0111 〒300-1259
FAX 0298-76-0945

印刷・製本／